

## 2-1 関係詞のない関係詞構文?

### — 関係詞を用いない用法：接触節

#### 1 「接触節」とは？

まず、次の文をご覧ください。

- Culture refers to the knowledge members of a given group are thought to more or less share.

\* refer to ～に言及する、～を指す given (形容詞で) 特定の more or less  
多かれ少なかれ share ～を共有する

この文では関係詞の which や that が登場していませんが、元は2つの文から成り立っています。では、この文の切れ目(つなぎ目)はどこかわかりでしょうか？

- ▶ Culture refers to the knowledge ∧ members of a given group are thought to { more or less } share.

切れ目の部分(∧)に関係代名詞の目的格を補うことができます。

- ▶ Culture refers to the knowledge ∧ (which / that) members of a given group are thought to { more or less } share ●.

「文化とはある特定の集団に属する人々が多少なりとも共有すると考えられている知識を指すものである」

先行詞は the knowledge です。ちなみに、元となる2文に分解すると次のようになります。

- ① Culture refers to the knowledge
- ② Members of a given group are thought to more or less share the knowledge.

関係代名詞がいわゆる目的格の場合、関係詞を省略する(と言うより使わない)ケースが多く見られます。特に会話体では、まず関係詞は使わない場合がほとんどです。which や特に whom を使う頻度はきわめて低いと言えます。

厳密には、関係詞の省略というより、「関係詞を用いないで、SVを

続けて名詞を説明する」といったほうが正しいのです。実際ネイティブスピーカーは「まず関係詞を使って、それからその関係詞を消す」などという作業を行っているわけではありません。このような形を名詞とSVがカンマも何もなしに接触することから「接触節」(Contact Clause)と呼ぶこともあります。皆さんの中にも、こちらの用法を先に教わった方もいるのではないのでしょうか。実際、最近の中学校での指導では who や which を導入する前に、この接触節から入る形が取られているようです。接触節から入る利点としては、格による who や whom / which などの使い分けをしなくてもすむ(関係詞を使わないのですから当然ですが)ことがあげられます。

#### 2 「接触節」であることを見抜くには？

ただ、「接触節」にも間違えやすい点がないわけではありません。上の英文で、接触節と気付かず、the knowledge members of a given group の部分を「ある特定集団の知識のあるメンバー」などと強引につないで解釈してしまった方はいないでしょうか？

まず、接触節の基本構造を示すと次のようになります。

##### 《 接触節の基本構造 》

- ① 名詞 + SV ... と続いたら接触節ではないか？
  - ② 他動詞もしくは前置詞の後が名詞欠落文になっていないか？
- 名詞 SV ... ⇒ 名詞 ∧ SV ●  
名詞 SV 前置詞 ... ⇒ 名詞 ∧ SV 前置詞 ● } 「～する〈名詞〉」

次の文でも切れ目を探してみてください。

- The girl you were talking to used to work for our company.  
「君が話していた女の子は以前うちの会社に勤めていたよ」

the girl you were ... と続く部分が接触節で、名詞の欠落部分は前置詞 to の後ろ(先行詞 The girl は to の目的語)となっており、The girl you were talking to まだがこの文の主語です。

- ▶ The girl! ∧ you were talking to ● used to work for our company.  
名詞 | SV 前置詞 ↑

「名詞SV ...」のVが分詞や動名詞になっていても同じことです。

- The company's former chief financial officer testified that \$12.5 million he is accused of stealing from the company was actually part of a bonus he had earned.

\* chief financial officer 最高財務責任者 testify ～と証言する accuse A of B AをBで告発する

この文には接触節が2か所あります。

- ▶ ① \$12.5 million △ he is accused of stealing ● from the company  
 名詞 | SV | was ～

「彼が会社から盗んだとして告発されている1250万ドル」

\$12.5 million △ he is accused ...は「名詞SV ...」と連続していることから接触節と考えることができます。この部分では、先行詞\$12.5 millionはstealingという動名詞の目的語になっています。from the companyまでがこの文全体の主語です。

- ▶ ② ... part of a bonus △ he had earned ● .  
 名詞 | SV

「彼が正当に稼いだ特別賞与の一部」

先行詞a bonusは他動詞earnedの目的語になっています。part of a bonus he had earnedがこのwasの補語になっています。

【訳】「その会社の前最高財務責任者は、彼が会社から盗んだことで訴えられている1250万ドルは実際には彼が正当に稼いだ特別賞与の一部であると証言した」

先行詞の元の位置をきちんと確認するという作業がいかに重要であるかについては、さらにp.096で詳しく検証します。

## まとめ

- 「名詞+SV ...」ときたら、「接触節」の可能性を考える
- 他動詞もしくは前置詞の後に先行詞の戻る位置があるか確認しよう

## 2-2 「名詞+SV」をきちんととらえる

### — 「決まり文句」で片付ける前に

#### 1 All you have to do is to ...の構造がわかっているか

会話でも頻出の表現にAll you have to do is to ...があります。一種の決まり文句ですが、これも接触節を用いる例の1つです。しかし思わぬ勘違いをする人がいるようです。

- All you have to do is to clean up the room.

- ▶ All △ you have to do ● is (to) do ... ②番目のtoは省略可能

これを「君たち全員がしなければならないのは部屋を掃除することだ」(×)と読んでしまう方がたまにいらっしゃいます。Allは「すべてのこと」という名詞でisの主語になっています。All youと続けて、「君たち全員」と読むのは誤読です。

ちなみに、「君たち全員」を英語で言うなら、You all またはAll of youとなります。そもそも、All youで「君ら全員」という意味にはなりません。他にもこの文が接触節であることの裏付けがあります。

この文にはhave to doとisという2つの動詞が登場します(ここではhave to doのかたまりを1つの動詞ととらえます)。2つ動詞があるということは、言い換えれば、主語となる名詞も2つ必要になるということです。

「1つの動詞に対して、主語は1つ」が英語の基本鉄則です。もちろんandやbutなどの等位接続詞を用いれば、1つの主語に対する動詞が2つ以上存在することはあり得ます。

He △ tried to open △ the safe, △ but △ failed △ .  
 S V 接続詞 V

「彼は金庫を開けようとしたができなかった」

② triedとfailedの主語はともにHeで、butでつながれている

冒頭の英文にはandやbutなどの接続詞はありません。ということは別の可能性を考える必要があります。2つの動詞isとhave to doの主語はそれぞれ別個に1つずつ存在しなければならないということです。